

メノウ

皆さんは、図のようなメノウを見たことがありますか？それらにはいろんな色や模様もようのものがあります。今回はメノウのでき方などについて、お話ししましょう。メノウは「瑪瑙」と書き、これは「馬の脳ミソに似ている」という意味だそうです。

メノウって何？

みなさんは、水晶すいしょうを知っていますね。水晶は石英せきえい（SiO₂）のうち、結晶けっしょうの形がはっきりとしているものを言います。石英の非常に細かい結晶けっしょうが集まったものを玉髓ぎょくずいと言います。その玉髓のうち、赤や白などの縞模様しまもようのあるものをメノウと呼んでいます。

メノウはどうしてできたの？

メノウの多くは火山岩の中に見られます。マグマが噴火して火山岩ができた時、ガスなどが抜けた跡に空洞くうどうができます。その空洞を流れる地下水から玉髓ぎょくずいが沈澱ちんでんします。玉髓は空洞の壁から内側に向かってくっついていきます。地下水の温度や流れの状態によっていろんな縞模様しまもようができます。

右上の図は縞状の同心円状どうしんえんじょうの模様もようができています。これは流れる地下水から溶けきれなくなったシリカが壁の内側に次々とくっついてできたものと思われます。

右中の図では、外側の縞模様は同心円状ですが、内側の中心部では縞模様は直線的でほぼ平行になっています。これは地下水の流れが遅くなって、場合によっては全く停止したような状態で、玉髓が重力の作用で沈澱したものであると思われます。すなわち、この平行の縞模様しまもようの面が、メノウができた当時の水平面であったという訳です。

元々ガスの抜けた空洞は丸みをおびていますので、メノウの塊かたまりもそのような形をしていることが多く、塊かたまりとしては何の変哲もない石に見えますが、それを切るとメノウの美しい縞模様しまもようが現れます。右下の図はメノウの塊かたまりを切って、切り口を磨いたものです。この塊かたまりも真ん中あたりで切れば、美しい縞模様しまもようが出てくることでしょう。

メノウはかたいので、周りの火山岩が風化してくずれても、このような塊かたまりで残っていることが多いのです。

メノウの利用

メノウは、日本では明治時代の初め頃まで火打石として広く利用されていました。現代では装飾品そうしょくひんとして用いられる場合が多く、平行の縞模様しまもようのものはオニックスと呼ばれます。さらに赤と白の縞模様しまもようのものはサード（オ）ニックスと呼ばれ、8月の誕生石たんじょうせきになっています。

現在日本で販売されているメノウは、ほとんどが人工的に着色されたもののようです。

